皆さんこんにちは。平野です。

今回、IOAJ で Applied Anatomic Treatment（AAT） を開催させていただくことになりました。

テーマは「頭痛とめまい」です。

私たちはオステオパシーを学ぶ中で、解剖学や生理学、そして Health、Stillness、Fulcrum、Potency、lesion など、さまざまなことを探究します。

そして実際の治療室で患者さんにどのように対応するかを考えたとき、臨床では理解の方向性が逆になります。

患者さんは「Fulcrum に問題があります」「私の健全を見てください」などと言って来られるわけではありません。

「頭が痛いんです」
「この頃フワフワめまいのような感じがします」
「生理痛がひどいんです」
など、様々な訴えを持って来院されます。

そんな言葉を聞いたとき、私たちは何を考え、何を診て、何に触れるのでしょうか。

たとえば、ひとことで「めまい」といっても、その背景にはいろんなことが考えられます。

耳から起こっているのか。
頸部が関係しているのか。
循環器系から来ているのか。
中枢神経系の問題ではないのか。
それらが複合して起こっている可能性はないか。

そして何より大切なのは、その方が今、私たちオステオパスの前にいて良いのか、それとも速やかに医療機関へつなぐ必要があるのかを判断することです。

これらの上に立つことではじめて、これまで学んできたオステオパシーが臨床の中で生きてきます。

A.T. Still 博士は Anatomy について単に身体の構造を学ぶこととして語ってはいません。（Philosophy of Osteopathy』第 I 章）

そこでは生理学、組織学、化学、正常と異常、そして実際の患者を観察し、身体に何が起きているのかを理解していくことまでを、Anatomy の学びの中に置いています。

今回開催する Applied Anatomic Treatment（AAT）の Anatomic も、そんな教えをもとにしています。

つまり解剖学の本に書かれた構造を、治療に当てはめるという意味ではありません。解剖学を治療に利用する立ち位置にはいないオステオパシーです。

A.T.Still 博士が示した広い Anatomy を、目の前にいる一人の患者さんの中で、どのように生きたものとして見つけていくのか。

これまで学んできたオステオパシーを、患者さんの訴えから辿っていく体験的チャレンジです。

今回は「頭痛とめまい」を入口として、医学的な鑑別、関連する解剖・生理、オステオパシーとしての診断と触診、そして治療を通してその「原因である健全」までを、皆さんと一緒に探究していきたいと思っています。

ここまで学んできたことを、実際の患者さんについてもう一度つなぎ直す。そんな 3 日間をイメージしています。

葉山の自然環境の中、皆さんとご一緒できることを楽しみにしています。

平野 寛 BSc (Hons) Ost